アジアの優しさに包まれて

薗宮　秀

1．裸足の人々

「とんでもないところに来てしまった」とボクは思った。国際空港だと言うのにそこで働いている人の中に裸足の人が多くいた。乗客の荷物を整理したり、運んだりしている人たちの全員が履物を履いていないのを見てボクは心底驚いてしまった。

ここはスリランカのコロンボ国際空港、1980 年の夏のことである。大学 4 年生のボクは、本来なら就職活動していなければならないのに、自分の将来を見定めることができないまま、学生生活最後の夏休みをスリランカで過ごそうと一人でこの国にやってきた。一ヶ月滞在する予定であった。大韓航空の格安航空券は帰りの日にちが指定されており、早く帰りたくなっても帰国日は変えられない。

しかし国際空港の中でも裸足の人がいることに少なからぬ衝撃を受けたボクは、これから一人で一ヶ月もこの国で旅を続けていけるのだろうか、と心配になった。「宿はどうやって見つけるのだろうか」「食べ物は大丈夫だろうか」「持ってきたお金で充分なのだろうか」と次か次へと不安な思いが湧き出してきた。

ボクは東京から持ってきた旅の情報誌である「オデッセ」をしっかり握り締めた。「オデッセ」はガリ版刷りの雑誌で、世界各地を貧乏旅行している日本人から、現地の情報を投稿してもらって構成している雑誌である。その雑誌の「スリランカ特集」をボクは東京に居たときから何度も読んでいた。他のガイドブックには目もくれずに、この雑誌一冊だけを頼りに、初めてのスリランカを一人で旅するつもりであった。

荷物は軽いリュックが一つだけで、その中の三分の一は寝袋であとは下着のパンツ

が一枚、靴下が一足、そしてTシャツとワイシャツがそれぞれ一枚だけである。ワイシャツは乾きが早いので、Tシャツが直ぐに乾かない時のために予備に持ってきた。下着や靴下は毎日洗濯すればよいので最低限の着替えしか持ってこなかった。他には簡便な洗面用具だけでカメラも持ってこなかった。大事なパスポートとトラベラーズチェックは腰バンドの中に入れ、黄色いTシャツに紺色のコットンパンツと運動靴と言う姿でボクはスリランカに入国した。

空港の外に出て驚いたのは、そこは熱帯のジャングルであった。国際空港は密林を切り開いて作られていたのである。焼けつくような激しい暑さを肌に感じた。顔を少し上げると、そこに生まれて初めてみる椰子の実がぶら下がっていた。島崎藤村の「遠き南の島から流れたる椰子の実一つ」という詩句を思いだしながら椰子の木を眺めた。その椰子の木々の間から見える空はとても青かった。その青さは心に沁みるような美しさで、その青空を見てボクはここに来て良かったのだと無理に思うようにした。

国際空港のあるネゴンボからコロンボ市内に行くため、空港近くのローカルバスに乗った。そのバス停でボクは生まれて初めて英語を話した。

「イズ　ディス　バス　フォー　ダウンタウン?」

そのバス停に立っている人に聞いたら「イエス」と返事があった。たったそれだけのことであったが、日本語以外の言語で外国人と意志を通じ合わせることができたことに、ボクは少し興奮し嬉しくなった。これで何とかサバイバルするための最低限の意思の疎通ができると思って安堵した。

バスの中にはいると乗客の大半がボクのほうをジロジロ見ていた。Tシャツにコットンパンツ姿は、彼らから見て直ぐに外国人と分かる格好だった。彼らの服装は上半身にシャツを着ているか、さもなければ裸で褐色の肌を晒しており、下半身はサロンと呼ばれる筒型の腰布を穿いていた。女性は上半身から足までサリーというインドと同じ民族衣装をまとっていた。洋服姿の人はほとんどいなかった。そして彼らの大半が裸足だった。

バスの窓の外は、テレビや写真でしか見たことのない南国の密林が広がり、ボクはその風景に感動した。が、気になるのはバスの乗客も裸足であれば、道を行く人の大半が裸足であることである。国際空港に着いてからずっと裸足の人ばかり見ている。これはボクにとって大きなカルチャーショックだった。何度も繰り返し読んだ雑誌「オデッセ」には、人々が裸足であることなどは書いていなかった。第三世界の国々では裸足の人が多くて、それが当たり前の光景となるので、旅の情報を送る人にとってはそのことを改めて書くまでもないことなのかもしれない。しかし実際にこれだけ多くの人が裸足でいる現実を目の当たりにして、ボクは非常なショックを受けた。

裸足は男性や子供だけでなく若い女性もそうであった。日本語には妙齢と言う言葉があるように、若い女性というのは本来色香を漂わせているものであるが、ここでは強い太陽の光りに輝く褐色の肌と彫りの深い容貌を持つ妙齢の女性が、色鮮やかなサリーをまとっているのに、その足元をみると裸足であることに、ボクは最初かなり違和感を覚えた。

それほどまでに大きなカルチャーショックを受けた裸足であるが、時間がたつにつれ、裸足は大地のぬくもりに直接触れるための、暑い地域に住む人たちの文化習慣ではないだろうかと思えるようになってきた。人々は大地をしっかり踏みしめて、大地の上で生きている実感を得るために、裸足で歩いているように見えた。勿論、それは履物すら買うことのできない貧しさの故であると説明できる。しかし熱心な仏教徒が多いこの国のいたるところで見られる仏像はどれを見ても裸足である。お釈迦様も履物を履いていない。日本の大仏も裸足であることを考えると、裸足は大地と人間を直接結びつける自然な姿ではないだろうかと思えるようになった。そしてこれだけ多くの人が裸足で歩いているのを目の当たりにすると壮観でもあった。裸足で歩くことはこの世に生を受けたことの原点でもあり、一種の喜悦であるのかもしれないと思えてきた。

2．物乞いの人びと

バスはコロンボ市内のバスターミナルに着いた。バスを降りると直ぐにたくさんの物乞いに囲まれた。物乞いの大半は身体障害者で中には目を背けたくなるような姿もあった。腕が肩からもぎ取られた若者、片眼のつぶれた老婆、顔全体が焼け爛れ褐色

の肌がケロイド状態になっている中年男性、背中のコブが異様に膨れ上がった老人、頭髪の半分が抜けて頭皮が白く乾燥してそこに赤い血が滲んでいる女性、片方の頬が異常に脹らんでその頬肉の重さのために下に伸びて、伸びた頬がまるで睾丸のように顔面から垂れ下がっている若い女の子などなど。

日本では見ることのなかったそれらの障害者の様を見て、ボクは気が動転してしまった。又、たくさんの物乞いに一度に囲まれたことで少し怖くなり、物乞いの手を振り切って歩き出した。物乞いたちから少し離れてホッとしていると、こんどは子供たちに取り囲まれてしまった。子供たちも「何かくれ」とねだっていたが、障害者と違って子供らは健康そうな顔をして可愛かった。このような子供には少しぐらいのお金を上げたくなったが、その時ボクは飛行機の中での会話を思い出した。

佐藤佐和子と名乗るその中年の女性は、飛行機の中でたまたまボクの横に座っていて、彼女のほうから声をかけてきた。

「あなた学生さん」

「そうです」

「スリランカは初めて?」

「はい。スリランカに行ったことありますか?」

と尋ねると佐藤佐和子はバッグから名刺を取り出した。その名刺には「日本―スリランカ貿易センター　代表　佐藤佐和子」と書いてあった。仕事柄、佐藤佐和子は何度もスリランカに行ったことがあると言った。スリランカの一人旅に不安を感じていたボクは彼女に少しスリランカのことを教えてもらおうと思った。

「あの、向こうの食べ物は大丈夫ですか」

「そうね。カレーライスはびっくりするほど辛いけど、『ノー　ホット　』と言えば辛くないものを出してくれるわ。それでも日本人にとっては辛いけどね。あとミルクティと一緒だとその甘さと、カレーの辛さが口の中で調和して絶妙な味になるわ。でも衛生観念は日本人と違うから気をつけたほうがいいわね。私は初めて行った時、向こうの人が黒いものを美味しそうに食べているので何かと思った

の。それがね、食べ物にハエが一杯たかっていて、遠いところからだとそれが黒い食べ物に見えたのよ。近くに行って見たらびっくりしちゃった。」

ボクはその話を聞いて、スリランカは凄いところだと思ったが、そんなところに何度も行くこの女性の方がもっと凄いと思い、自分がスリランカの一人旅を不安に感じていることが少し恥ずかしくなってきた。

「カレーが駄目だったら、パンもあるし、果物もあるから何とかなるわ。永住するわけではないのだし、旅行だったら毎日パンでも食べていれば大丈夫よ」

この人は豪傑だと思ったボクは一番に気になっていた物乞いのことを聞いた。

「物乞いがたくさんいると聞いているのですが、それは大丈夫ですか」

「物乞いはびっくりするほどいるわね。でも恵んでくれって手を出すだけで、何も危害は加えないから大丈夫。聞いた話だけどあの人たちのバックには組織があるらしいわ。だから同情を引くために、五体満足な身体なのにわざと傷つけて障害者にしてしまうそうよ。物乞いはとても多いので、安易な同情心でわずかなお金をあげても何一つ解決しないわ。私は基本的に人に恵むのはよいことだとは思ってないの。物乞いにお金をあげて良いことをしたと思って気持ちよくなる人というのは、安直な偽善者だと思うわ。そんなことするぐらいなら、ユニセフなどの慈善団体に寄付した方がずっといいと思っている。それから子供にも何かくれと囲まれるからね。むこうの子供は日本の子供と違って信じられないくらい純粋な目をしていて、とても可愛いから、何かあげたくなるけど、これもやらないほうがいいわね。一人の子にあげるとそのあと何十人という子供が、一斉に手を差し出すから収拾がつかなくなるのよ」

ボクは無邪気な表情を浮かべている子供たちの顔を見て、佐藤佐和子が言っていたことはこのことだと思った。そしてこの旅ではどのような物乞いに出会っても、どんなに可哀そうに見えても「人に恵んであげるようなことはしない」と心に決めた。

3．文化と衛生観念の違い

それにしてもこの異常な暑さと街の汚さ、その上にどこに行っても人に囲まれる経験は初めてだったので、ボクは頭の中で何かが音を立てて回り始めているように感じた。自分の置かれているこの状態をはっきり把握できずに、一体自分は今何をすべきなのかが分からなくなってきた。とにかく暑いしこのうるさく付きまとう人々から早く逃れたいと思った。そんな時、そこに漢字で書かれた中華料理の看板が見えたので、ボクは一息つくためにその店に飛び込んだ。お客は地元の人ばかりで中華料理店という雰囲気はなかった。入ると直ぐに鼻をつくような強烈な匂いがした。この匂いはスリランカの食堂ではどこでも漂わせているココナッツオイルであることが分かった。ウェーターからメニューを渡された。英語も書いてあったがよく分からなかったので、唯一理解できる「焼き飯」を注文した。しかし出てきたもの見てびっくりした。油の中に飯が浮き上がっていて、見ただけで食べられないと思った。それでもどんな味かと思って一口だけ食べた。吐き出したくなるぐらいに不味かった。その上よく見るとハエやゴキブリの死骸も入っていたので、もう食べる気はしなかった。

それにしても中華料理も食べることができないとすれば、この国で何を食べていけばよいのだろうかとまた不安がよぎった。やはりとんでもないところに来てしまったのだと感じた。しかしこの中華料理店で初めて飲んだスリランカの紅茶はとても甘くて美味しかった。ミルクと砂糖がたっぷり入っているので甘いものが好きなボクはそれだけでとても嬉しくなった。確かに飛行機の中で佐藤佐和子が言ったようにこのミルクティがあれば、あとはパンと果物だけで一ヶ月ぐらい何とかなると思った。そんな食べ物のことを心配するよりも、日本とは極端に違うこの国の色々を経験し体験することの方がずっと意味があるように思われた。そう思うとさっきまで混乱していた頭も落ち着きを取り戻し、気分が少し楽になったボクは、スリランカでの最初の夜を過ごす宿を見つけるために中華料理店を出た。

町を歩くと多くの人から声を掛けられたがそれを無視してひたすら歩いていると、大八車にたくさんのココナッツを並べているのが見えた。見ると通行人がココナッツを買ってそれを飲んでいた。それがとても美味しそうに見えたので、ココナッツを飲んだことのないボクも一個買った。ココナッツ売りの男は、茶色に錆びついた釜でココナッツの上の方を叩いた。1回では切れないので、何回か叩くようにして切ってようやく切れた。ココナッツの殻は非常に硬いのだ。男は切ったココナッツをそのまま

渡してくれたが、見ると切り口には錆が思い切りついていて、非常に汚らしかった。ここに直接口をつけて飲むのは憚れると思ったら、男はスッとストローを差し出してくれた。しかしそのストローはナイロン製ではなく、ボール紙のような紙でできたストローだった。飲むと最初に紙の味が液体に溶けてしみ込んでくるようで、何とも言えない味がした。最初の一口は紙の味を感じたが、直ぐにココナッツの果汁本来の味に変わった。水のように透明で甘くもないので、少しがっかりしたが、熱い身体にそれが入ると気分がすっきりするような感じがした。しかし紙のストローは長く使っていると、のりしろの部分が溶け出し、紙もふやけて曲がるようになるので最後は使えなくなった。果汁を飲み干すと中に白いクリームがあり、これも食べられることを初めて知った。

ある家の前を通ったときその家の主人と思われる老人から、ニコニコ顔で「どこから来たのか」と声を掛けられた。足元を見るとその人は裸足ではなく靴を履いていた。「日本から」と答えるとびっくりした様子で、「はるばる日本からきたのか、中に入ってお茶でも飲んでいけ」と言う。外から見るとその家は結構立派だった。どのような暮らしをしているのか興味があったのでボクは言われるままに中に入った。早速ミルクティを振舞われた。リビングにはスリランカらしく象の置物が置いてあった。お茶を飲みながらいろいろ話した。とは言え、ボクの英語力では老人が何を言っているのかよく分からなかったが、分かる単語だけ繋げて、その意図を推測しながら聞いていると何とか会話になった。ボクはこの旅行のために、中学校の英語の教科書とそのテープを買ってきて、声を出して教科書を読み、テープを聴くことをしただけであったが、それで何とかブロークン英語は話せるようになっていた。

一通りの会話も終わったので、そろそろ引き上げようと思っていた頃に、老人が「この家に泊まって行け」と言ってきた。まさかさっき会ったばかりの外国人を泊まらせることなど思いもつかなかったので、それがどういうことか理解できずに、ボクは返答に窮していたら、こんどは「お金を取るから遠慮するな」と言ってきた。ボクはそれが親切心からではなくビジネスとして申し出ていることを理解して、いくらか値段を聞いた。日本円で８００円ぐらいだったので、最初から民家に泊まるのも面白いと思って応諾した。

部屋につれて行かれた。小さな部屋にベッドが置いてあり、蚊帳がベッド全体を覆っていた。このような南国の蚊帳を実際に見るのは初めてでとてもエキゾチックだった。部屋の横には簡便なシャワー室があった。お湯はでなくて水しか出なかった。最初は冷たかったが、長く浴びていると水も平気になってきた。

夕食に呼ばれて行くと、家族数人が既に席についていた。食事はカレーライスだったがそれは日本のカレーとは全く異にしていた。カレーには日本のような具らしい具は入っていなかった。そのカレーの汁をパサパサしたご飯にかけて、スプーンは使わずに手で食べるのである。見ていると、右手にカレーのかかったご飯を器用に握り、それを上手に口に運んでいた。手で食べることは知っていたが、それを実際に見たのは初めてだった。しかし手で食べることは思ったほど見苦しい食べ方ではないと感じた。むしろ食べる人によっては、スプーンで食べるよりも優雅に見えたのが不思議だった。

ボクのテーブルの前だけはきちんとスプーンとフォークが置かれてあった。でもボクはそれを使わずにみんなと同じように右手だけでカレーライスを食べた。カレー汁の付いたご飯を最初に握るときは少しためらいがあったが、直ぐに慣れた。ただカレーはびっくりするほど辛かった。頭のてっぺんに辛さが一気に伝わり、口の中が痛くなってきた。直ぐにミルクティを飲んだ。するとその痛さが一瞬にして和らいだ。佐藤佐和子が言っていた甘さと辛さの絶妙なバランスとはこのことだと思った。カレーは辛いから美味しいし、ミルクティは甘いから美味しく飲める。何故カレーがあんなに辛いのか、何故ミルクティがあんなに甘いのかが分かったような気がした。

食事のあとはスリランカのトイレの洗礼も受けた。便器は和式に似て、かがんで行うようになっていた。水洗式ではあるが、バケツに水を汲んで自分で流すようになっている。トイレットペーパーはない。スリランカでは右手が清浄な手と決め食事をし、左手は不浄な手で水を使って排泄後の処理をする。

ボクはトイレットペーパーを持ってこなかったので現地のやり方で処理した。初めての体験だったが、紙を使うより合理的で気持ちよいと思った。手づかみでカレーを食べる事とトイレで紙を使わずに処理する事が、思った以上に簡単にできたので、ス

リランカの一人旅の不安はいつの間にか消えてしまった。

4．ホスピタリティ

三日ほどコロンボに滞在したボクは都会の喧騒を逃れるために、郊外行きのバスに乗ってみた。適当なところで下りて、あてもなくブラブラと歩き回った。そこは思った以上に静かなところで、あたり一面は南国の花が咲き乱れていて美しかった。一軒家ばかりが立ち並ぶそのあたりは、まるで高級住宅地を思わせたが、建物はどこもお粗末なつくりの家ばかりだった。

ある家の前を通り過ぎたとき、そこに一人の青年が大工仕事をしていた。その家のドアが半分開いていたので、ボクは普通の人たちがどのような暮らしをしているのかと思って中を覗き込んだ。それは自分でも失礼な行為だと分かっていたので、遠慮しながらであったが、大工仕事をしている青年と目が合ってしまった。青年は中を覗き込んでいたボクを当然のことながら不審そうに、咎めるように睨んだ。ボクは慌てて、「自分は怪しい者ではなく、スリランカの人たちがどんな生活をしているのか、興味があったので覗かせてもらった」としどろもどろの英語で説明した。青年はボクの話す事が良く飲み込めないようで、最初は眉をひそめながら聞いていた。ボクはますます真面目に必死で説明しようとすると、彼のほうから軽く微笑みながら話を遮った。

「あなたはどこから来たのです」
「日本からです」
「おう、日本からか。スリランカはどうです」
「人はフレンドリーで親切ですね」
「そうか。スリランカ人はとてもホスピタリティがあるだろう」
「本当にそうですね」
「ところで中に入ってお茶でも飲まないか」
「いいんですか」
「もちろんだよ。プリーズ　カム　イン」

「中でお茶を飲んでいけ」と言うのは、この国の客に対するもてなしであることを知った。中に入るとテーブルが一つと椅子が数脚あるだけで、他には何もなかった。

奥の方から青年の奥さんが恥ずかしそうに出てきてお茶を差し出してくれた。スリランカの女性は非常にシャイで物静かでおしとやかである。この青年の奥さんも少し顔を出しただけで、あとは直ぐ奥に消えてしまった。

スリランカではどこでも甘くて美味しい熱いお茶を飲ませてくれる。この国では冷蔵庫がまだ普及していないので、冷やして飲むことはなかった。でも熱いお茶の方が却って喉の渇きを抑えて、健康に良いと思った。

ボクはそのことを青年に話した。ボクの拙い英語が青年に通じたかどうか怪しかった。何故なら青年は少し悲しそうな顔をして「スリランカは貧しいから普通の人は冷蔵庫を持っていない。あなたは冷蔵庫を持っているか」と聞いてきたからである。ボクは「イエス」と答えて複雑な思いがした。

その頃、ボクは東京で四畳半の木造アパートに住んでいた。家賃は一万円で東京ではかなり安いアパートである。しかし一万円はスリランカの普通の労働者にとっては二ヶ月でも稼げない金額である。ボロアパートの小さな部屋には冷蔵庫があり、テレビもあり、電話もある。だがこの青年の家はボクのアパートより立派であるが、家の中には冷蔵庫もテレビも電話もなかった。青年はボクのことを金持ちでよい生活をしていると思っているのだろうが、ボクはこの青年の方が良い生活をしていることを言いたいと思ったがやめた。そのような複雑なことはボクの英語ではとても表現できなかった。それに金持ちと言うことであれば、ボクは少なくともこの青年より金持ちであることは間違いなかった。何故ならボクには日本からスリランカに来る飛行機の切符を買うお金はあるが、青年には日本に行く切符を買うお金はないからだ。

青年から近くのゲストハウスがある場所を聞いてボクはその家をでた。出るときも、その青年の奥さんは顔を出さなかった。送り出してくれたときの青年のにこやかな笑顔が、ボクの心に残った。

あるゲストハウスの前でそこの客引きに声を掛けられた。値段を聞くと日本円で１０００円ぐらいだった。ボクは「エクスペンシブ」と一言発すると直ぐにその客引きは８００円でどうかと下げてきた。それなら先ず部屋を見せてくれと言って、ボクは

客引きのあとについて部屋に行った。ベッドに蚊帳がないことを言うと、「モスキートコイルがあるからノー　プロブレム」と言う。モスキートコイルはスリランカではあまり効果はないと聞いていたので、ボクはこれだったら７００円だと言うと、客引きはあっさり７００円で了承してくれた。

その日の夜、ボクは大量の蚊に悩まされた。蚊だけではなかった。南京虫にもやられた。ボクは子供の頃、南京虫のでる家に住んでいた事があるので、その虫のことを知っていた。十数年ぶりにその虫と邂逅したボクは、ギョッとしたが懐かしさも感じた。道理で客引きは１０００円の言い値から７００円まで下げても直ぐに了承したのだ。これでは７００円でも高いと思いながら、何度も夜中に寝返りをうって、ようやく明け方近くに眠りについた。

6．現代文明から取り残された漁村

ボクはスリランカ鉄道の3等切符で列車の旅を楽しもうと思った。だが3等列車には窓がなかった。列車の扉にところどころあいている穴から、外の光が差し込んでくるだけで、そのわずかな光で中の様子が少し分かった。それは明らかに貨車に少し手を加えただけのものであった。ボクはナチスドイツがユダヤ人を運んだ列車や、アメリカで黒人を運んだ列車はこういうものであったのだろうと想像した。それらと違うのは、座り心地が極端に悪い硬い椅子の座席があることぐらいであると思った。

3等列車の乗客は心なしか皆暗い顔をしていた。本当にこれからナチのユダヤ人収容所に入れられるような暗い顔をしていた。ボクはとてもそんな雰囲気の中で耐えることができず、1時間もしないうちに下車した。下りた駅がどんな所か分からなかったが、その無人駅から美しいインド洋が見えた。そこは地図にも載っていないさびれた漁村だった。ボクはここでゆっくりしようと思った。ここには宿はないかもしれないが寝袋を持っているので、海岸で寝ようと思った。ボクは高校のとき、北海道でオホーツク海を見ながら野宿したことがあるので、ここではインド洋を見ながら野宿してみるのも面白いと思った。

ここ連日泊まる先々で、蚊と南京虫に悩まされていた。体中に赤い斑点ができて日中も痒くて仕方がなかった。そしてリックからも下着からも南京虫が出てきたのに我

ながらびっくりした。そこで、海岸で自分の身体とすべての持ち物を日干しにした。海岸で横になると何日も熟睡していなかったので、直ぐに眠ってしまった。目が覚めるとボクは上半身裸の子供たちに囲まれていた。みな１０才以下の子供だった。「ハロー　ハロー」と呼びかける。都会の子供と違って、ここの子供は何かをねだっているのではないことは分かった。純粋に外国人に興味をもっているのである。ボクが歩くと子供たちも全員があとについてくるので、ボクはとても愉快な気持ちになった。

　すると向こうから１３－４歳の少年が走ってきて、英語で話しかけてきた。少年は自分の家に来いというので、ボクは少年に連れられるままにその家に行った。その家は椰子の木で作られた小屋だったが、中は結構清潔であった。部屋に入ると、直ぐに少年の母親がお茶を出してくれた。少年の英語はボク以上にブロークンであったが何とか意思の疎通はできた。少年が言うにはこの村には、外国人が来ることがなく、数年前にドイツ人が来ただけだと言う。その時も少年がドイツ人の相手をしたようで、その時に取った写真を少年は大事にとっておりそれを見せてくれた。写真はそのドイツ人が送ってきたもので、そこには白人の男性と、今よりも幼い少年がこの家をバックにして写っていた。少年はボクにカメラを持っているかと聞くので、持ってないと答えると残念そうな顔をした。ボクはその顔をみて、カメラを持ってこなかったことを少し後悔した。

　少年はよく「アー　ユー　アングリー?」と聞くので、ボクは「怒っている」と言う意味のＡＮＧＲＹと理解し、へんなことを聞くなと思っていた。ところが何度も聞くので、おかしいと思っていたら、「アングリー　カリーライス?」と聞いてきたので、それがハングリーのつもりで言っている事が分かった。ボクは少年に向かってハングリーと言いながら、お腹をおさえる格好をして、アングリーと言いながら両手の拳を握って顔を顰める真似をした。その仕草で分かったのか、少年はＯＫと言って笑った。それから奥の部屋から少年の母親が出てきてカレーとライスが運ばれてきた。少年は「イート　イート」と言ってカレーをしゃもじですくって、ボクの皿にかけてくれた。ボクは遠慮なくライスを右手で握った。上手く握らないと粘り気の全くないパサパサしたご飯は、指の間からポロポロ落ちる。ご飯がボクの指から落ちるのを見て少年は笑いながら言った。

「この村にはホテルがない。家に泊まってくれ。この部屋が空いているから。でもベッドがない」

ボクはリュックから羽毛の寝袋を出して少年に見せながら言った。

「これがあるから、ビーチで寝るよ」

少年はその寝袋に触って、その柔らかな手触りを楽しみながら、「グッド、グッド」と何度もつぶやいた。どうやら少年は寝袋を見たことがないようだった。

「これがあればベッドが要らない。だったらこの部屋で寝ればよい。ビーチでは誰も寝ていない。ビーチで寝ては危険だ」

ボクは「ビーチで寝るのは危険だ」と聞いて少し心配になった。外国の海岸で野宿を経験してみたいと思っていたが、それよりもスリランカのさびれた漁村の民家に泊まるという体験もまた得がたいことだと思って、ボクは少年の家に泊まることにした。

リュックを部屋に置いて、少年と一緒に家の外に出た。既に日が沈んで真っ暗だった。村には電気がなく夜になるとランプを点していた。椰子の木で作られた家々からところどころランプの明かりが漏れていたが、村全体は暗闇に沈んでいた。空には満天の星が輝いており、こんなにたくさんの星を眺めたのは初めてだった。まるでプラネタリウムを見ているように星が直ぐそこにあるように見えた。星と月の光だけで映し出された砂浜はまるで幻覚を見るように美しかった。ボクは自分が宇宙という空間の中で生きていることを初めて実感した。

翌日、寝袋の中で目を覚ますと、オモテでたくさんの子供たちがボクの寝ている部屋を覗き込んでいた。遊び道具のないここの子供にとって外国人は好奇の的のようで、外国人をいつまでも眺めても厭くことがなかった。子供はどの子も純粋な目の輝きをしていた。やがて少年が現れて一緒に朝ごはんのカレーを食べた。スリランカの一般家庭では朝昼晩と三食ともにカレーを食べていた。少年の母親は食事の世話をするだけで一緒に食べようとはしなかった。この家には少年と母親の二人だけで、父親も他

の兄弟もいないように見えたが、そのことは少年には聞かなかった。

ボクはこの村を見学するために、一人で朝の散歩にでた。子供たちが後ろからゾロゾロと付いてきた。この村の大人も突然に村にやって来た外国人を好奇な目で見た。この村には電気もガスもない。木を燃やして煮炊きをしている。水道も井戸もなかった。女性たちが地面を深く掘って、そこから湧き出る泥水を掬って水がめに入れていた。泥水の泥が沈殿してから、上水を掬って飲用するのである。

7．スリランカ最北の町、ジャフナ

少年の家には象を人間化した絵が壁に貼られてあった。ヒンズー教徒の証である。スリランカではシンハリ族が人口の約 7 割を占める多数民族で、仏教徒がほとんどである。ヒンズー教徒というのは人口の約 2 割を占めるタミール族に多い。この村はスリランカの少数民族であるタミールに属していた。シンハリとタミールは仲が悪く、常に争っていた。言葉も違っていて、スリランカの公用語はシンハリ語とタミール語と、英語の三つになっていた。同じスリランカ人でもシンハリとタミールの人が会ったときは、お互いに言葉が通じないので英語で会話する。

スリランカを大きく分けると、タミールは北部を中心に居住しており、シンハリは南部の大半に住んでいる。首都コロンボや古都キャンディなど観光名所の多くは南部にあるので、外国人旅行客は北部にはあまり行かないし、旅行案内でも北部のことはあまり紹介されていない。南部のシンハリの人たちは、北部には見るところもなく、タミールは悪い奴が多いし、治安も悪いから行かないほうが良いと言う。

ボクはタミールの漁村に来てから、この国の少数民族であるタミールとその宗教であるヒンズー教に興味を持ち始めた。スリランカは仏教国として有名であるが、実際はヒンズー教徒も少なくない。タミールはインド南部とスリランカ北部に居住する民族で、スリランカのタミールの中心地は北部最大の都市、ジャフナである。そこに行けば、ヒンズー教やインドの雰囲気を少し味わえるかもしれないと思ったボクはジャフナに行くことにした。しかし北部に行くことは少し危険でもあった。いつ紛争が勃発するか分からないし、もし北部にいる間に紛争が起きれば帰れなくなるかもしれない。しかしボクはそれも面白いと思った。せっかく生まれてきたのだから、体験でき

ることは何でも体験しようと思った。もしそれで取り返しの付かない結果になっても、それは仕方のないことと思うようになっていた。

スリランカの悠久な時間の流れにいると、自分の人生の時間がとてつもなく小さく感じられた。右手で口の中に食べものを入れ、それが身体の中を循環して廃棄物となり、肛門から排泄されて、それを左手で処理する。この営みがボクには輪廻転生と感じられた。今自分が死んだら親は悲しむだろうが、その親も３０年後か６０年後にはこの世に存在しない。無限の時の流れの中で、人間の喜怒哀楽などはすべて一瞬のこと。永遠の悲しみもなければ、永遠の喜びもない。すべてのものは必ず終わりそしてまた始まる。偉大なことも愚かなことも人間のすべての営みは果てしなく続く時の流れの中に消えていく。そう考えるとボクはたとえ紛争に巻き込まれて、万一死ぬことになってもそれも運命と思った。

ボクはその少年との再会を約してその漁村をあとにし、鉄道で島を北上してジャフナに向かった。切符は三等ではなく二等にした。二等には窓もあり、きちんとした座席もあった。座って南国の長閑な田園風景を楽しんでいると、突然少女が這いつくばってこちらに進んでくる姿が目に入った。列車には乗客はまばらだった。だからこの少女がボクの前で止まることは分かった。少女には両足がなく腕だけで前進している。案の定、ボクの前に止まった。ボクは見ない振りをしてずっと窓外に目をやっていた。少女がボクをずっと見つめている事が痛いほど分かった。スリランカに来てこのときほど苦しいことはなかった。ボクは苦しくて窓外を見続ける事ができずに、少女の顔を見た。目が深い悲しみと怒りを表わしていた。少女もボクの目を見続けていたが、やがてとても悲しそうな顔をして、また両腕だけで他の車両に移って行った。ホッとすると同時に少し自分が嫌になってしまった。

ジャフナに着くと治安が悪いと聞いたので、安宿を探しながらウロウロすることはやめてＹＭＣＡに決めた。ここでも子供たちが直ぐに集まった。ねだって何かをもらおうとするのもいたが、純粋に外国人が珍しくてついてくる子もいた。スリランカではどこでも欧米人のバックパッカーがいたが、ジャフナは大きな町にも関わらず、あまり外国人は多くいなかった。子供たちにＹＭＣＡを聞くと、直ぐに連れて行ってくれた。部屋に入ると、扇風機が天井に掛かっていて、熱い風を送っていた。

翌朝早く起きて、ジャフナの町を散歩した。ヒンズー教の匂いが至ると所に感じられて、インドのようであった。ボクにはタミールの人とシンハリの人との区別はつかないが、仏教徒とヒンズー教徒では何となく雰囲気が違うことは分かった。

喉が渇きお腹もすいたので、レストランにはいってマンゴージュースとカレーライスを注文した。喉が非常に渇いていたので、店においてあった水ポットの水をコップに注いで飲んだ。変な味がすると思ったが、一気に飲み干した。見るとコップも汚れていて、指でコップの淵をたどると黒い煤が付いた。そのコップを持って太陽の光に当てて見ると透明なグラスがかなり汚れているのが分かった。あとから地元のお客が入って来て、その水ポットを取り上げると、コップを使わずに、直接口に運んで水を飲んでいた。ゴクリと美味しそうな音をたてかと思うと、そのお客は口の中にあった水をペッと勢いよくオモテに吐き出した。それを見ていたボクと目が合うと一言「バッド　ウォター」と言った。ボクは笑って、そして心の中で言った。

「その水は腐っているかもしれないが、飲んでも死にはしないよ」

やがてマンゴージュースが出てきた。中にハエの死骸が二匹浮いていた。それを指差してウェーターに言うと、彼は自分の黒くて汚い指をグラスの中に突っ込んでハエを取り出してくれた。そして笑顔でそのグラスをボクに返してくれた。カレーライスには小石が入っていたので、ボクは石を口の中で右に寄せて、時々それを吐き出しながら食べた。ハエや小さなゴキブリの死骸も入っていたが、それは見つけるたびにつまんで捨てた。そして心の中で思った

「ハエの一匹や二匹、胃の中に入っても大した問題じゃない」

ここジャフナでは南部とは反対にシンハリの悪口を言う人が多かった。スリランカは北海道よりやや小さな島なのに民族の対立は深刻であった。ここにはタミールが暴動を起こせば、直ぐに制圧できるように政府軍が駐留していた。

ボクは町でこの駐留軍の一員から声を掛けられた。若い将校で日本に興味があると

言う。そして夜、彼のテントに来るように言われたボクは公園の中に張られてあるそのテントに、ノコノコと出かけて行った。その将校はタミールの悪口を言い、「タミールさせ静かにしてくれればスリランカは平和でよい国になるのに」とため息交じりで話した。そのあと日本はアジアで唯一の先進国で素晴らしいと褒めていた。そして何を思ったか、将校は腰に着けていた短銃をボクに持たせてくれた。初めて握る銃はずっしりと重みがあった。だがボクはこの銃を持たなくてすむ日本人で良かったと感じた。

ジャフナもスリランカの他の町と同じで、外国人と見るとガイドをしてやると寄ってくる人がいる。これらのガイドは、「前にアメリカ人を案内して友達になった」と言ってその人が書いた住所のメモを見せたりする。中には日本人が書いた日本の住所を見せてこの日本人は友達だと言って安心させようとする。ボクはそのようなガイドを相手にしなかったが、ジャフナではガイドについていくのも、たまには面白いかもしれないと思った。そこにある若い男が、自分は「ガイドではない」と言って近づいてきた。

「私は会計士で今日は休みなので、外国からきたあなたを案内したい。あなたは、はるばる日本からスリランカにそしてこのジャフナに来てくれたのだ。ここには綺麗なビーチがあるので連れて行ってあげます」

「いくら掛かりますか」

「ガイド料は要らない。ただ私の友達の車で行くので、彼にガソリン代を払ってくれ」

「ガソリン代だけでいいのですか」

「もちろんだよ」

この自称会計士という男が言ったガソリン代は少し高いと思ったが、ガイド料も含まれていると理解してボクは車に乗った。ビーチには数組の白人のグループがいるだけでとても静かな海岸だった。ボクはビーチの端から端まで散歩するつもりで歩きだすと、会計士の男は、「荷物は俺が見張ってやるから、海で泳いだらいい」と、しつこく言ってきた。男の魂胆は分かっていたので、それには応じなかった。ビーチも満喫したので、元の場所に戻るように伝えた。帰りの車の中でも、男は何度も「次はど

こに行きたいか」と聞いてきたが、ボクは相手にしなかった。やがて元の場所に着き約束のガソリン代を払ってボクは下りた。そこで男と別れるつもりであったが、男も下りてきてボクのあとに付いてきた。困ったなと思っていると、ちょうど目の前に映画館があったので、「映画を見るからガイドは要らない」と言うと、男は「この映画館の支配人は俺の友達だ」と言う。映画館の入り口でボクが切符の買い方が分からず悩んでいると、中から恰幅の良い白髪の初老の男性が出てきて話しかけてきた。

「何かお困りですか。私はこの映画館の支配人です」
「映画を見たいのですが」
「あなたが。あなたはどこからきたのですか」
「日本からです」
「それは遠いところから来ましたね。日本人のあなたがローカルの映画を見たいのですか。ところでそこにいる男はあなたのお友達ですか」
「違います。この男はあなたの友達と言っていますが」

それを聞いた支配人はすべてを理解したようで、男に向かって何か話すと男は逃げるように消えて行った。ボクは支配人にお礼を言うと映画館に入った。スクリーンには王宮で民族衣装を着た沢山のインド人女性が音楽に合わせて踊る姿が映っていた。言葉は分からないがその音楽と踊りの美しさにボクは退屈しなかった。

暫く見ていると支配人が現れて、「どうせ見ても分からないだろう」と言ってドライブに誘ってくれた。ドライブと言っても車ではなくオートバイである。南国の暖かい風を顔面に思い切り受けると気持ちが良かった。やがて桟橋に着いた。そこで夕日に輝く赤いインド洋を見ながらスリランカや日本について話し合った。

「スリランカの印象はどうだ」
「人々は親切で、明るいし、自然が美しい国です」
「そうか。スリランカは貧しいが美しい国だろう。日本はどんな国か知らないが、豊かな先進国というイメージがある。そうだ。この海の向こうにデルフィトというとても貧しい島がある。そこに国際機関から派遣された日本人の医者がいるそうだ」

「本当ですか。日本人がその島に住んでいるのですか」
「そうだ。その島には医者がいないので日本人の医者が派遣されているみたいだ」
「そうですか」
「ではそろそろ帰ろうか。ホテルまで送るよ」

ＹＭＣＡまで送ってくれた支配人は最後に「またスリランカに来てくれ」と言って、熱い手でボクの手を握ってくれた。

8．日本人の医者を探して

心地よい疲れと共に部屋に戻ったボクは、支配人から聞いたその日本人の話しが気になった。ジャフナには日本人はほとんど来ていないのに、そこから更に離れた島に日本人の医者が頑張っていると思うと、ボクは自分の血が熱くなるのを感じた。その日本人に会いに行こうと思った。このスリランカという国について、その人と語り合いたいと思った。

翌日、ボクはデルフィト島行きの小さな桟橋にいた。船は 10 人も乗れば満杯になるボートであった。そこに地元の人たちはたくさんの荷物を持って乗り込むので、直ぐに窮屈になった。外国人は誰もいなかった。小さなボートにたくさんの荷物を積んでいるので、少しでも大きな波が来れば転覆間違いなしと思った。ひょっとして日本に無事帰れないかもしれないと言う気持ちはあったが、不安ではなかった。どんな生き方をしても死ぬ時は必ず来るのだからすべて運命に任せようと思っていた。

それよりも島に着いたら、どうやって日本人の医者を探そうかと考えた。また島に宿があるのかどうかも気になったが、なければ野宿しようと思っていたところに、一人の青年から話しかけられた。話しかけられたが、この青年の英語は英単語を羅列するだけだったので、意思の疎通は困難だった。それでもボクは、その青年に日本人の医者について聞いたが、彼は医者に掛かったことがなく「島には医者はいない」と言っていた。

デルフィット島に着くと、この青年はボクをある家に連れて行ってくれた。そこにはコンクリートの玄関の上に、上半身裸でひざを抱えながら座っている人がいた。そ

の人はお客が来ても立ちあがりもせず座ったままであったので、ボクにはかなり横柄な人に見えた。青年がこの人は日本人医師について何か知っているかもしれない、というので話しかけてみた。

「この島に日本人の医者が居ると聞きましたが、あなたは知っていますか」
「あー知っている」
「その人に会いたいのですが」
「ではこの青年にその場所を教えるから、連れて行ってもらいなさい」
「有難うございます。ところでここにはホテルはありますか」
「そんなものはない。この青年の家に泊まればよい」
「分かりました。ところであなたは何をしている人ですか」
「スクールティーチャーだ」

学校の先生と聞いてボクはびっくりした。どうみても怠惰な農夫にしか見えなかった。先生だから少し偉そうな口の利き方をし、人と座ったままで話すような横柄なところがあるかと思った。でも英語を話すのだから、この島では立派な知識人に違いなかった。

青年はその先生から聞いて、日本人医師の住む家に連れて行ってくれた。ボクは胸が高鳴ってきた。どのような日本人だろうかと想像した。そしてその家から出てきた人を、目を凝らして観察した。少し違うと思った。肌の色はスリランカ人ではないが、しかし日本人にしては色が少し浅黒い。肌の色もさることながら、顔つき、目つき、そして顔全体からくる雰囲気そのものが日本人でないと感じた。だからボクはその人に英語で話しかけた。

「フェーアー　アー　ユー　フロム?」
「アイム　フロム　バーマ」

やはり日本人ではなかった。だがボクにはバーマが一瞬どこの国か分からなかった。暫くしてそれがビルマの英語の発音だと気付いた。日本人の医者に会いにわざわざこの島に渡ってきたボクは非常にがっかりした。ジャフナで、この島に日本人がいると

聞いてやってきたことを伝えると、彼はにっこりして答えてくれた。

「この島には日本人はいないので、多分それは私のことを言っているのでしょう。ここの人たちにとっては日本人もビルマ人も区別がつきません。私は国際機関から派遣されてここで医療活動しています」

ボクはビルマについてはほとんど何も知らなかったが、ビルマは日本などの先進国が援助している発展途上国なのに、その国がまたスリランカは援助していることを知った。

この島に来た目的は終了した。1日1便しかでていないので、ジャフナに戻る船はもうなかった。さてどうするかと思っていると、この親切な青年が、あの横柄な先生が言うように、自分の家に泊まれというので、彼についていくことにした。しかし彼の家は島の奥地にあった。そこまで、この島の唯一の交通機関であるバスに乗った。スリランカに来てから、ボクは日本では見ることのないような「おんぼろバス」をたくさん見たが、その中でもこの島のバスは極めつけだった。バスの中から空が見えるし、下を見ると石ころだけの道が見える。バスに揺られてでこぼこ道を行くとき、ボクふとは自分がどこまで旅をするのかと思った。「日本から本当に遠いところに来てしまったな」という感慨が突然に起こった。

青年の家の周りには見渡す限り何もなかった。その家が1軒あるだけである。この1軒の家のためにバス停があった。そして青年の家は簡易郵便局も兼ねていた。家には奥さんと7－8歳の女の子と生まれて間もない乳飲み子がいた。

家に着くと青年は早速ボクに埃のかぶった古いトランジスターラジオを見せた。青年はこの壊れたトランジスターラジオを修理してもらいたかったのである。しかしボクにはそんなことはできなかった。直せないことを伝えると青年はがっかりしていた。それから青年はボクを散歩に誘ってくれた。かなりの時間歩いたが、そこには野生のポニー（ロバの一種でロバより小さい）が何十匹もいた。青年はその一匹を口笛で呼び寄せてボクに乗せてくれた。乗り物の揺れがダイナミックに感じられて楽しかった。やがてあたりは暗くなり家路についた。空には星が輝いていたが、道は宇宙のように

暗かった。青年とボクは一言も話さず黙々と歩いた。歩いている時間は来たときよりも長く感じられた。行けども、行けども辿り着かないので、まるで地の果てを歩いているような錯覚に陥った。

ようやく家に着いた。夕食のカレーを食べ、食事の後片付けが終わると、女の子がテ
―ブルで勉強を始めた。算数だった。ランプの薄明かりの下で少女が、懸命に計算している姿は健気であった。少女の筆記具は非常にお粗末なものだった。鉛筆は少し強く持つと折れてしまいそうだし、ノートは画用紙のように灰色にちかく、紙質も悪かった。それでも黙々と勉強している姿にボクは何か心温まるものを感じた。

翌日、朝起きると少女は既に起きていて、裏で飼っている鶏に餌を与えていた。スリランカの子供は親の代わりに弟や妹の面倒をよく見る。少女も赤ちゃんの面倒をみていたが、鶏に餌をあげている間は、赤ちゃんは裸のまま、玄関のコンクリートの上で寝かされていた。日本の赤ちゃんは柔らかい服に包まれて、快適な揺りかごで寝かされているのに、ここでは裸でコンクリートの上で寝かされている。ボクはこの赤ちゃんが日本のどの赤ちゃんよりも、健やかに丈夫に育つ事を願わずにはいられなかった。

電気やガス、水道がない生活は既に経験したが、それでもここのトイレにはボクもびっくりさせられた。トイレは家の裏地に穴を掘ってそこに椰子の木の丸太を二本掛けているだけであった。穴の中は椰子の葉っぱがたくさん敷いてあった。たったそれだけの作りで、身を隠す囲いは何もなかった。家が一軒しかないので、他の人に見られる心配はなかった。しかし空の下で、周囲３６０度、何も視界をさえぎるものがないところで、大をするのはさすがにボクも憚られた。でも他にする場所はなかった。ボクは覚悟を決めて、丸太に足を掛け、腰から下が風でスースーするのに奇妙な感覚を覚えながら、気張った。

スリランカの日差しは暑い。どこに行っても道端には牛や馬、象の糞が落ちている。糞が落ちた時は匂うが、数時間もすればカラカラに乾いて足で蹴ると崩れてしまう。乾いた糞には汚さは感じられなかった。それは人糞も同じことであった。

昼ごろにバスが来たのでボクは青年に御礼を言い、あの健気な少女にさよならをしてバスに乗った。バスから下りて船の桟橋に向かって歩いていると、突然、目の前に自分の視線と同じ高さに水平線が目に入った。明るい青い空と深い蒼い海とをくっきりと分かつ水平線は一幅の美しい絵を見ているようだった。

桟橋にはジャフナに戻る船が停泊していた。もうこの島に再び訪れることはないだろう。日本人医師がいると聞いてやって来たのに、残念ながら日本人はいなかったが、ボクはこの島に来て良かったと思った。あの青年とあの少女そしてコンクリートの上で寝かされていたあの赤ん坊に出会ったが、これから先もう二度と彼らに会う事がないことを考えると、ボクはここで一泊した思い出は一生忘れずに心に刻んでおこうと決めた。

ボクの旅はまだ予定の半分しか終わっていなかった。でもボクは既に多くの親切な心と出会い、素朴で質素な生活をしている人たちから、人間の根源的なところで大切なことをたくさんもらったような気がしていた。

ボクはスリランカに来て良かったと心から思うようになっていた。

完